令和元年度 月刊 校長通信 10 号

（生徒・保護者版） R２.１.２８（１ 月号）

少々遅くなりましたが、新年のごあいさつを申し上げます。竹は、節目から枝を出します。私たちも、年の節目を意識することで、創造の枝を伸ばしていきたいものです。

俊英NOW

●スキー部の活躍

スキー部は、発足５年目で男子４名女子４名、人数も最多となりました。１月中旬、長野県の高校総体と国体の代表選手予選が小谷村栂池高原で開催され、多くの選手が代表権を獲得しました。特に女子大回転では、インターハイ予選、国体予選ともに長野俊英高校が 1･2･3 位で表彰台を独占しました。全国大会での活躍を期待します。

【結果】 ※10 位まで表示

◎1月15日～17日：長野県高校スキー選手権（インターハイ予選）

【女子回転】 2位渡邉愛蓮(1-6) 3位小林ひかり(1-6) 5位大屋ジェシカ(3-6)

【女子大回転】 1位保坂花(1-6) 2位小林ひかり(1-6) 3位渡邉愛蓮(1-6) 4位大屋ジェシカ(3-6)

※1位～4位を長野俊英高校が独占！(県の枠でインターハイは3位まで)

【男子回転】 5位船本叶(3-6) 10位船本新大(2-6)

【男子大回転】 7位船本叶(3-6) 8位船本新大(2-6) ※下線インターハイ出場選手

◎1月18日：長野県国体予選会

【女子大回転】 1位小林ひかり (1-6) 2位保坂花(1-6) 3位渡邉愛蓮(1-6) 4位大屋ジェシカ(3-6)

※ここでも1位～4位を長野俊英高校が独占！

【男子回転】 8位船本新大(2-6) 10位船本叶(3-6) ※下線 国体出場選手

※柳沢光希先生撮影動画より

校長ESSAY

聖母もありがたいが、生母はもっとありがたい

今から10年ほど前、私は小諸高校の校長を勤めていた。小諸高校には、長野県唯一の音楽科（音楽の専門学科）があり、毎年10月に県民文化会館（現ホクト文化ホール）で音楽科の定期演奏会が開かれていた。演奏会のフィナーレは、オーケストラと合唱団による大曲となる。その年（平成21年、2009年）は、ヴィヴァルディ作曲『グロリア』という作品となった。ヴィヴァルディ(伊：1678-1741)といえば、ヴァイオリン協奏曲集『四季』が超有名だが、『グロリア』という曲は、あまり知られていない。天上の父なる神の栄光をたたえる全12曲の宗教曲で、私もこのとき初めて知った。

前々から、せっかく小諸高校にいるのだからという思いがあり、意を決して定期演奏会の合唱団に参加させてもらうことにした。しかし、かなりハードルは高かった。歌詞は、ラテン語で、まったく未知の世界である。心配したが、繰り返しが多く、ローマ字読みでカタカナにすればＯＫなので、何とかすることができた。

「Domine Fili unigenite Jesu Christe
（ドミネ フィリ ウニッジェニテ イェーズー クリステ）
····Cum Sancto Spiritu in Gloria Dei Patris Amen」
（クム サンクト スピリトゥー イン グロリア デイ パトリス アーメン）

「唯一の御子である主､イエス･キリスト····聖霊とともに､父なる神の栄光のうちに｡アーメン｡」

（※こんな文句を覚えたので、今度どこかの教会で唱え、まわりを驚かしてやろうと思っているが、いまだ実現していない。）

問題は旋律である。これについては、音楽科のバスパート男子生徒の歌声を録音して練習用テープをつくり、これを死ぬほど聞いて少しずつ覚えていった。

しかし、アンコール用の『アヴェ・ヴェルム・コルプス』（モーツァルト作曲）と『大地讃頌』は、演奏会直前に楽譜をもらったので大変苦労した。『アヴェ・ヴェルム・コルプス』は、聖母マリアを讃える美しい曲だが、バスパートは、低音で抑揚のない旋律が続き、まるで御詠歌のようで、非常に覚えにくかった。

というような苦労の末に本番を迎えた。素晴らしい演奏だった。自分のすぐ後ろで音楽科の先生のバスがボーボー響いていたので、何とか無事歌い終えることができた。拍手が続く中、自分はひたすら感動していた。ところがここで予期せぬ事態が発生した。感動の余韻に浸っていると、突然、指揮者（音楽科主任）から舞台正面に招かれたのである。「今回は、校長先生も参加してくれました。」と紹介され、コメントを求められた。大変ありがたかったが、事前の打ち合わせがなかったので焦ってあたふたしてしまった。人前でしゃべるのは慣れているつもりだが、アドリブは、なかなか効かないものである。

実は、演奏会に私の老母も来ていた。終演のあと、出口でお客様たちを見送っていると母がそっと近づいてきた。「校長は､もっと堂々としていなさい｡」母は、小声で言い残すと去っていった。いくつになっても母は母、聖母マリアもありがたいが、生母はもっとありがたいのである。